

小泉八雲のことども(続き)

根 本 重 熙

東京時代の小泉の生活点描 (ヘンドリック宛書翰) [承前]

1897年 8月 東京

(前略) この東京ではこのいまわしい東京では、日本の印象は、長時間をおいての時おりでなければ、少しも得ることが出来ない。君にこの事を記述することは全く不可能である。一国一州について説明することの方が遙かに容易であろう。ここでは、外国の公使館などがある地域は、巧妙に描いたアメリカの場末の町と言った恰好だ。そのすぐ近くには幾百年の古さを示す風のシナ式門がある地所。少し行くと何マイル平方もの非常な汚穢の地。それから踏みつけられて砂塵の荒地となった(みっともない兵營が周囲に聳え立つ)数マイルの陸軍練兵場がある。それから木陰はと言うと真黒な、誠にこの世のものとも思われない美に満ちた大公園がある。次には、何マイル平方もの、一年に一度は焼ける商家の町がある。また汚穢な場所。次に稲田と竹藪だ。

それからまた町になる。それが皆平坦なのではなく、坂だらけ。大うねりにうねった大都會である。鬱蒼たる伝奇的な静けさ。工場、停車場、混雑した場所が互に入り混っている。遠くから見れば大きな歯ブラシを立てたような数マイルの電柱の行列などは見てもぞっとする。いくら行っても尽きない水道鉄管は大通りの通行の邪魔をする。すでに七年かかって、地中に敷設しようとしているのだが不正事件やら何やらでなかなか捗らない。広大な貯水池が出来ているのだがまだ水がない。雨が降れば市街が溶ける。鉄管が沈む。鉄管敷設の穴が、足元の弱い老人を溺らせたり、遊んでいる子供を呑み込む。蛙が往来で盛んに鳴き合うという騒ぎ。こんな無茶苦茶騒ぎの真中で詩だの未来だの永劫だのと考えるのはむずかしい。詩神は東京ではお留守だから、海岸へでも行って探すつもりです(後略)

既述したように、小泉夫妻は、明治29年に、大学赤門前の三好屋に投宿(8月20日)次に竜岡町の竜岡楼に転じた(同28日)。ついに大学から遠いのを一つの取柄に、市ヶ谷富久町二十一へ移った(9月26日)。高台にあり日当りのよい新築の家であった。その家は現存しない。家の後は自証院円融寺(俗称瘤寺)であった。田部氏によれば、その寺は寛永17年(1640年)に、尾張藩主徳川光友侯夫人千代姫自証院の菩提のため、創建されたもの。檜の皮を剥いだままの用材であるため節目の瘤が著しく目立っていた。瘤寺の名のある由縁である。東京の西部に別天地を作り上げていた。数百年の杉樹叢生して昼なお暗い程に森森としていたものだという。

小泉夫人の追憶

妻セツの「思い出の記」により、この時代の小泉氏の生活を一瞥してみよう。彼女は述べている。富久町に引移りましたが、ここは庭は狭かったのですが、高台で見晴しのよい家でもございましたそれに瘤寺という山寺のお隣りであったのが気に入りました。昔は萩寺とか申しまして萩がなかなかようございました。お寺は荒れていましたが、大きい杉が沢山ありまして淋しい静かなお寺でした。毎日朝と夕方には必ずこの寺へ散歩に出かけました。(八雲が)たびたび参りますのでその時のよい老僧とも懇意になり、いろいろ仏教のお話など致しまして喜んでいました。それで私も折折参りました。日本服で愉快そうに出かけて行くのです。気に入ったお客などが見えますと『面白いのお寺』と言うのでそこへ案内致しました。子供等も、パパさんが見えないときには『瘤寺』と言う程でございました。

散歩しながら申しました。『ママさん私この寺にすわる、むずかしいでしょうか』この寺に住みたいのであるが何かよい方法はないのだろうかと申すのです。『あなた、坊さんでないから、むずかしいですね』『私坊さん、なんぼ、仕合わせですね。坊さんになるさえもよきです』『あなた、坊さんになる、面白い坊さんでしょう。眼が大きい、鼻の高い、よい坊さんです』『同じ時、あなた比丘尼となりましょう。一雄小さい坊主です。如何に可愛いでしょう。毎日経読むと墓を弔いで、喜ぶの生きるです』『あなた、ほかの世、坊さんと生れて下さい』『ああ、私願うです』

小泉氏が前掲の書信の中で言う詩神は海岸(筆者注:氏は遊泳の達人で、海が深くて波が荒いという理由で、焼津が一番好きであった。そこでは一日に三回は必ず海に入った。雨天でも雷鳴の日日も例外ではなかったとのこと)と、東京では瘤寺の境内だけで、お姿を現わされるようであった。その境内は(セツが述べているように)散策コースであり冥想の道場、珍客接待の座席でもあった。しかしこの貴重な自然も、滔滔と押し寄せる文明開化の貪婪な大波の前には抵抗の術なく墓地は移され森林は伐採され、その場所は貸地貸家となった。(既述したように)八雲が懇意であった或る老僧が、大きな杉の木を三本切り倒したのを見て、彼がひどく失望し、以後その僧と疎遠になったとセツが語ったのはこの瘤寺でのエピソードである。

引き続いてセツの話を書くことにしよう。“間もなく、老僧は他の寺に行かれ、代りの若い和尚さんになってからどしどし樹を切りました。それから私どもが移転しましてから、樹がなくなり、墓が除けられ、貸家などが建ちまして、全く面目が変わりました。ヘルンが言う静かな世界はとうとう、毀されてしまいました。あの三本の杉の樹が倒されたのが、その始まりでした。淋しい田舎で、家が小さく、庭が広く、樹木が沢山ある屋敷に住みたいとかねがね申していました。瘤寺がこんなになりましたので、私は方方探させました。西大久保に売り屋敷がありました。全く日本風の家で、あたりに西洋風の家さえありませんでした。

私はいつまでも借家住いで暮すよりも、小さくとも、自分が好きなように、一軒建てたいと申

しますと、『あなた、金ありますか』と申しますから、『あります』と申します。『面白い、隠岐の島で建てましょう』といつも申します。私が反対しますと、それでは『出雲に建てて置きましょう』と申しますから、全く土地まで探したこともありました。しかし私はそれほど出雲がよいとも思いませんでしたから、ついこの西大久保の売屋敷を買って建増しをすることに、とうとうなったのでございます（中略）西大久保に引移りましたのは、明治35年3月19日のことでした。万事日本風に造りました。ヘルンは紙の障子が好きでしたが、ストーブを焚く室の障子をガラスに致しただけが西洋風でした。引移りました日、ヘルンは大喜びでした。書棚に書物を納めたりします。私は傍で手伝っていますと、富久町よりも家屋敷が広いのと、その頃の西大久保は今よりずっと田舎でしたので、至って静かで、裏の竹藪で鶯がしきりに囀っています。『如何に面白いと楽しいですね』と喜びました。また『しかし心痛いです』と申しますから、『何故ですか』と問いますと『余り喜ぶの余りまた心配です。この家に住むこと長いを喜びます。しかし、あなたどう思いますか』などと申しました。”

西大久保に移ってから八雲が単独でまたは家族とともによく散歩に行った場合は、戸山の原、雑司ヶ谷、高田馬場、目白台、落合、新井、堀の内であった。関口から雑司ヶ谷にかけて、大層よい所だ。もう20年も若ければこの山の上に住みたいと言ったとセツは述べている。

教子達の“恩師を語る”

A. 大谷正信（前出）。松江出生（小泉先生の）は明治24年11月15日であった。著者（同先生）が所謂ただ旅券を待っている頃訳者（大谷）は師を訪問したことがある。その時『先生は、これまでどういうことをして来られた方なのですか』と尋ねたものだ。『書いてあげよう。待っておいで』と言って次の室へ行かれ、書翰用紙一枚の表裏に、例の、初は細かく後ほど太い字で書いたのを呉れられた。ここに紹介してもよかろう。こう書いてある、とて掲げている。

I was born in the town of Leucadia in Santa Maura, which is one of the Ionian Islands, in 1850. My mother was a Greek woman of the neighbouring island of Cerigo. My father was an army-doctor, attached to the 76th English Regiment of the Line. The Ionian Islands were at that time under British protection,— because the Turks had been killing all the Greeks there.

My parents took me to England when I was only five or six years old. I spoke Romaic — which is modern Greek and Italian ; but no English. My father went to Russia some years after, and then to India. Myself and brother were brought up by rich relations and educated at home. My father and his wife died in India of fever.

When I was about 15 years of age, I was sent to France to learn French, and spent several years there. I was eighteen years of age, when my friends lost all their property ; I was

obliged to earn my own living. I went to America in '69, and learned the printing business. After some three years more, I gave up printing to become a newspaper reporter. I reported for several large papers in Ohio for eight years. Then I went South to become literary editor of the chief paper of New Orleans ; and remained there ten years. In the meantime I had begun to publish some books,— novels, translations, and literary sketches. In 1887, I became tired of writing for newspapers, and I went to the French West Indies, and to South America, to write a book about the tropics. I returned to America two years later, and after publishing my books, resolved to go to Japan.

And then I became a teacher.

〔自分は1850年に、アイオニア群島の一つの、サンタ・モーラのリュウカディアの町で生れた母はその近くのセリゴという島のギリシャ女であった。父は英国歩兵第76連隊付の軍医であったアイオニア群島は——トルコ人が、そこのギリシャ人を殺しつつあったから——当時英国の保護の下に在った。

両親は自分がやっと五、六才の頃英国へ連れて行った。自分は現代ギリシャ語であるロマイック語とイタリヤ語を話していたのであって、英語は使っていなかった。父は数年後にロシアへ行きそれからインドへ行った。自分と弟とは富裕な親類に養育され家庭で教育を受けた。父とその妻とは熱病に罹^{かか}って印度で死んだ。

自分は15才ばかりの時に、フランス語を覚え^{おぼ}えに、フランスへ送られ、そこに幾年かを送った。

18才の時、自分の友達はその財産全部をなくした。そこで自分は自分で食って行かなければならぬことになった。69年にアメリカへ行って、印刷業を教そわった。それから3年ばかりして印刷業を止め新聞通信員になった。8年間オハイオの夥多の大新聞に通信した。それからニュー・オルリアンズの一番大きな新聞の文学部長になることになって南部へ行って、そこに10年居た。その間幾つか書物——小説、翻訳並びに文字的スケッチ——を出版しはじめたのであった。1887年に新聞の為に文を書くことに飽きて、熱帯について書物を1冊書こうと仏領西印度と南アメリカとへ行った。2年経^たってアメリカへ帰って、書物を出版してから、日本へ行こうと決心した。そして教師になった〕(訳文大谷)

B. 田部隆次は、その著^{ラフカディオ・ヘルン}“小泉八雲”の冒頭で、小泉氏の伝記の材料として信ずべき物の第一は同氏が、早稲田大学のために書いた簡単な履歴書であるとして、それを提示している。(a. b. 2項の説明文を添えて)

a. (履歴書の中で) 服部一三を文部次官としたのはヘルンの思い違いで、実は普通学務局長。

b. 小泉氏が自ら家人に示したのは、この生年月日(1850年6月27日)の方である。「彼の祖父が、彼の両親に与えた“バイブル”の^{フライリーフ}白紙には Patricio Lafcadio Tessima Carlos Hearn, 1850

年8月誕生と記入してある」とは、ケンナード夫人〔筆者注：ハーン家の親戚であるという。ハーンの伝記作家の一人、その著書は“ラフカディオ・ヘルンの伝記および著書”（1912年）。明治42年ハーンの遺族訪問のため来日したとのこと〕の言。「言うまでもなく、誕生死亡の日付を“バイブル”に記入するのが西洋の習慣である」とも氏は言う。

Curriculum Vitae

Koidzumi Yakumo (Lafcadio Hearn), originally British subject. Born at Leucadia (Santa Maura), Ionian Islands, 1850. Brought up in Ireland, England, and Wales,— also for some time in France.

Went to America in 1869. Lived as printer and journalist. Became eventually literary editor of New Orleans Newspaper. At New Orleans met Ichizo Hattori, Esq.,— then Commissioner at the New Orleans Exhibition, afterwards Governor of Hyogo Ken. From 1887 to 1889 in Martinique, French West Indies. Sent to Japan in 1890, by the publishers Harper Brothers. Obtained, through the good will of Mr. Hattori, then Vice-Minister of Education, a position as teacher of English in the Ordinary Middle School of Matsue, Idzumo. In the autumn of 1891 went to Kumamoto, and taught in the Fifth Higher Middle School until 1894. In 1894 went to Kobe, and acted for some time as editor of the Kobe Chronicle. In 1895 became a Japanese citizen. Called to lecture at the Tokyo Imperial University in 1896 and held the chair of English Literature as lecturer until 1903,— 6 years and 7 months.

Author of eleven books about Japan.

小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）元英国臣民。1850年アイオニヤ群島リュカディア（サンタ・マウラ）に生る。アイルランド、イングランド、ウェールズ（および一時はフランス）にて成人す。1869年、アメリカに渡り、印刷人および新聞記者となり、遂にニュー・オルリヤンス新聞の文学部主筆となる。ニュー・オルリヤンスにて当時ニュー・オルリヤンス博覧会の事務官、後に兵庫県知事たる服部一三氏にあう。1887年より1889年まで仏領西印度のマルティニークに滞在。1890年、ハーバー兄弟書店より日本に派遣される。

当時の文部次官服部氏の好意により、出雲松江の尋常中学校に於て英語教師の地位を得。1891年の秋、熊本に赴き、第五高等中学校に教えて1894年に到る。1894年、神戸に赴き、暫時「神戸クロニクル」の主筆となる。1895年日本臣民となる。1896年、東京帝国大学に招かれて講師となり、1903年まで英文学の講座を担当す。——その間6年7ヶ月。日本に関する著書11部あり。（田部氏訳）

上掲履歴書に示すように新聞記者となったハーンは“Cincinnati Inquirer”社を振り出しに2年後“Commercial”社に転じた頃には、新聞記事の上に、古今東西に亘る哲学宗教文学科学の諸方

面に関する深い趣味と教養を示すようになった。学校生活とて短く、食物を求めるに急な生活を続けつつ若き日の恩師は「どうしてこのような驚くべき学問修養が可能であったのか」と田部氏はその著書の中で自問し「第一に師の読書の驚嘆すべき速力従って分量。第二には、絶大なる記憶力の故であったのだ」と自答している。

C. 齊藤信策は前出の“小泉八雲氏を悼む”の中で次の通り述べている。大変に長い。短縮の上敢えて採録する。1894年熊本の高等学校にありて Glimpses of Unfamiliar Japan (日本瞥見記) 2巻を著わしてより、既に詩人の名声を内外に博したる小泉八雲氏が、一度故外山博士の推薦と尊敬とに黙し難くて、遂に明治30年以来東京帝国大学の英文学の講師となりしより前後7年に及びぬ。吾人が親しくその教えを受けたりしは、実に氏が大学を去る前、僅に2ヶ年に過ぎざりき。然れども吾人も又今に於て自白するを躊躇せざる也。氏は実に最も大なる感激と感銘と感化とを吾人に与えたるの人なりき。蓋しこれ、氏が講堂に入りて、親しくその風豊を仰ぎ見し人人の必ずや自覚する所ならん。吾人は今に於て唯その温容に接したるの、あまりに短かかりしを恨むのみ。

氏は欧州の人なり。然れども氏の容姿には何処にも欧州的なものあらず。氏は梳らず、敢て飾らず、氏の体軀は日本にありても寧ろ短小なり、その容貌また猛からずして、笑顔はさながらに優しくして女性的なり。氏は眇にして更に近眼なり。然れども常に眼鏡をかけず。氏は欧州の服を着ず。然れどもワイシャツを着けず。絶えてカラーを用いず。而してその衣服は色半ば褪せて春秋恐らくは唯一種而してその帽子また鼠色にして鏝広く、冬夏唯一個也。その風采の素朴驚くべく、これを一個の労働備者として見誤る固より無礼ならし。氏や斯くの如き容姿を以て車を駆りて大学に来るや敢て教授室に入ることなく事務員に面することなく直ちに車を下りて紫の風呂敷包みを抱え階段を駆け上りて自らの講堂に入る。鐘鳴りて1時間の経過を報ずれば、氏即ち10余分の休憩を私して室外に出でて唯、人なき廊下を徘徊す。若し天清からんか、即ち戸外に出で、程近き大学の庭池の辺、巨大なる七葉樹の下に佇み仰いで蒼蒼の緑葉に思い入りて静かに無名の小鳥の妙音に憧れながら徐に懷中より煙草入れを取る。氏は葉巻を用うること極めて稀なり。常に日本の煙草を用い更に日本の煙管を用う。一度之を吸えば氏は即ちその残灰を掌上に吹き落し速に煙管に煙草を盛りその灰を点じて吸うこと更に再三、宛然これ一農夫の姿なり。かくて時至れば氏は再び自らの講堂に駆けて入る也。

氏の一度壇上に立つや、天才として詩人としてのラフカディオ・ハーンの風豊は躍如として活現し来り、座右自ら風を生ず。而して講義を為すや敢て一の草稿を携えず。言即ち直ちに文を為す而してその文や真に神品にして句句悉く珠玉を為す。更に氏は如何なる長時間の講義と雖も、敢て椅子に寄るなく、目は俯する無くて常に仰ぐ、然らずんば窓際に佇立して間間校外の無限なる光明を觀ず。而してその講義の進むに従いて氏はいよいよ感激し、その目はあやしげに輝きて、さながら現実の陰に隠れたる幽玄の实在を、まのあたりに觀ずるに似たり。その声音や玲瓏、詩的にして靈妙を極め言はますます錦繡の彩を為す。恰も今見つつあるものを説き明かすが如く、

滔滔数千言，語一度口を出ずれば，また繰り返えさるるなく更に滞^{とどこお}るなく，唯進み唯新となり例えば春潮の湧き返る如く，秋風の森林を渡るが如し。斯^{かく}の如くにして氏はいよいよ熱誠の人となり，その頬^{ほお}は紅に燃え，眼はいよいよ鋭くして，さながら一切の世界を忘る。流汗^{しぼしぼ}屢^{しばしば}頬を伝いて滴^{したた}るも，氏は少しも知らざるなり（以下略）

氏は蓋し最も深く日本の性情を理解したる人也。氏は英文学者なり。英仏文学の古今に最も精通するは固^{もと}より，氏は大なる独創的天才なり。氏は常に秀^{ひい}でたる一個の見識あり。故に氏の文学史を講ずるや単に詩文を読み乃至その趣味を有し得るの故を以てにあらざる也。寧ろ氏はその中にありて永遠の神性を観得して自らの天地を説明せんが為に常に詩人の言動に借る。（以下略）

吾人日本の学生に説くに当りては，氏は更に日本の性情の体现となり，常に特殊なる国民的分子を避けて世界人心に普遍なる情感の詩文を説く。もしそれ日本的性情の殊に理解すべき点に至りては最も意を尽くして懇説す。例^{たと}えば氏嘗^{かつ}て曰^{いわ}く「詩人テニソンの詩は思想に於て言語に於て両両完璧，真に近代英国詩文界の王冠にして又英国語の精華なり。然れども彼の靈妙^{なつか}は半ば日本民族の到底解する能わざるものあり。何となれば彼が詩の靈美の半ばを形成する言語美の妙は，英国民を外にして色読する能わざる所なればなり。故に日本の人は，唯その想によりてテニソンの偉大を解釈せざるべからず」と。而して氏は常に想によりて吾人に説く。故にその語る所の英文学史には何処に於ても吾人の直接の性情と感想の理想化を印せざるはなし。（以下略）

氏の大なるは是^{これ}のみに止まらず。氏は最も勤勉なり，熱誠なり，懇切なりき。氏は最も学生を思いたる人なりき。氏には大学なるもの無くして寧ろ大学の学生のみありき。而して氏の靈妙なる講義は年年殆ど新にして実に6年を継続せり。而かも6年1日の如くなりき。吾人今に及びて氏に聴くことの余りに短かかりしを恨むのみ。（中略）氏は真に自己の天職を自覚せる人なり。彼の徒^{いたづら}に，旧稿^{ひつき}を掲げ博学^{てら}を衒^にいて天才の名を為すを悪むが如き学徒にあらず。又かの妄^{みだり}に平凡にして不親切なる講演を持續して巧言令色^{ひとよ}，偏^こに官辺者流に媚ぶるが如き学徒にあらず。真に氏は大学の教授として，理想的なるものと言うべき也（以下略）

D. 田部隆次（再出）は言う。小泉八雲先生が英文学の講師として東京大学文学部に勤務されたのは，明治29年9月から同36年3月までであった。授業時間は1週12時間。教科書を用いたのは5時間，講義は7時間であった。英文学全体に通ずる史伝評論とも言うべき講義は，在職中内容は変わっているが2回繰り返された。その他文学に関する各種の題目についての講義は，毎週一定の時間に連続して行なわれたが，それぞれ独立した物で一回も同一の物を繰り返えされた事はなかった。先生は何等原稿らしい物を携えないで，ただ年代^{デート}などを記入した粗末な小さな雑記帳をポケットから出して時々参考^{かいこ}にされるだけであった。蚕^{かいこ}の口から続いて出る絹糸のように，或は咳唾珠を成すように先生の口から間断なく流れ出る文章を一言も聞き洩らし書き落すまいとして，当時^{いま}未だ万年筆などゆう物を知らなかった私共は，インキ壺にペンを入れる暇もない程に忙しくペンを走らせたのであった。その速力は筆記帳によって察すると，（中略）中版の浄野紙の雑

記帳にぎっしり書いた物が1時間(約45分)に5ページ程進んだのであった。

E. 戸川秋骨は言う。教室へ入って来られると先生は日本流に丁寧にお辞儀をしてから、風呂敷包を解き、書物を取り出し、それから蜘蛛の巣を出すように、するすると少しの澱みもなく、あの流麗な文字が吐露されたのであった。私は直ちにあの流麗な文字というが、それは今日先生の文学論として沢山に公刊されている書物の文字を指すのである。あれは主として先生の当年の講義であるが、先生は決してあれを草稿から読まれたのではない。全く脳裏から直接に口へ伝えられたのであって、あの名文は口をついて直ちに成ったと云って差支えないのである。

F. 内ヶ崎作三郎は述べている。小泉八雲先生の名を知りたるは僕が猶第二高等学校に学んだ時であった。(中略)明治31年9月僕。本郷台の人となり親しく先生の警咳に接することを得た。僕は非常なる興味と熱心とを以て先生の講義を筆記した。(中略)僕等初心の者にとりてはロセッティ(Dante Gabriel Rossetti)の評論は余りに幽遠微妙であった。されど先生の清く澄んだ、歌う如き声が、微かに笑みを湛える口辺より漏るるを聞く時は、その事自身が一種の魅力であった。僕等は続いてスインバーン(Algernon Charles Swinburne)とブラウニング(Robert Browning)との評論に心を踊らせた。先生の英文学史の講義は余りに早口であったが、趣味豊なる材料、適切なる批評、露淀みなく清水の如く湧出する華麗なる文字の片言隻句も書き漏らさじと、僕等は右手の指頭をインキに汚すをもともせず、ペンを走らせた。

先生の許にありて三星霜の教えを受けしことは、僕にとりて終生忘るべからざる追懐である。先生が我等に遺したるものは文学的事実のみでない。一種の気品であり、情調である。これは実に尊いものである。僕は日本に居る間は、この事を然程有難いと気付かなかった。しかし欧米を遊歴して幾多の学者雄弁家の前に立った時、始めて僕は、先生が僕等に遺されしものが如何に高貴なるかを理解し得たのであった。

僕等は教室以外に於ては先生に接近することを遠慮した。先生が来客を喜ばれぬという事が誰言うもなく伝わったからであった。僕が先生を訪問したるは、先生が暝せらし年の春であったと記憶する。僕は高田学長の命を帯びて先生を、早稲田の学園に迎えんが為の下相談をすることであった。当時先生は、和服で座蒲団の上に正座せられ、長い煙管にてタバコを吸われた。懐より片目の近眼鏡を取り出されて、一二度僕の顔を眺められた。僕の不束なる使命もどうやら果されて、帝国大学を辞せられたりし先生を稲門に迎え得たのは、僕の甘美な記憶である。されど、先生の稲門に来らるる何ぞ遅くして、その去るや何ぞしかく速かなりしぞ。先生一朝この世を捨て早稲田幾百の健児の眼に涙の玉が輝いた(以下略)

G. 落合貞三郎は記述している。廊下へ出ると夢から醒めたようだった。美しい文章、面白い説明。先生の口から滾滾と流れ出ずる興味の多い講義に引きずられて、私達はノートの上のペンを

走らせながら、殆ど無我^{ほとん}幻^{まぼろし}の境に翱翔する。私達はテニスン（Alfred Tennyson）の“芸術の宮殿”に逍遙遊したり、ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti）の“楽土にある乙女”が凭^たった黄金の欄干から下界を見下ろしている。そして2時間の講義が終って大教室（今は焼失した文科大学20番の）を出ると私達は始めて現実に帰ったのである。それは私達が所謂^{いわゆる}文学の講義を聴いていたのではなくて文学そのものに触れつつあったからだろう。

先生の文学論は少なくとも次の特質を有するものと言ってよからう。

1. 創作家のそれである。
2. 特に日本の学生を対象としてのものである。
3. 自由独立の立場から述べられた。
4. 寛容広潤なる見解が基調を為している。

学究者流のそれではない。理論に没頭し、又は検討考証に墮^たすることなく、自身作家として創作の苦杯^{くはい}を嘗^なめつつあった人の口から吐かれた体験的真理が含まれている。この特質こそこの講義に貴き価値を与えねばならない。ローマン主義と古典主義について講ずれば、単に主義、文体の差異を叙説するに止^{とど}まらず、青年作家をして取捨善処せしめるようにと教示することを忘れない。ロセッティの散文物語を紹介しては換骨奪胎^{かうくわつたい}の手法を学ぶことを勧め、生活及び性格と文学の関係を述べるに当っては、作家修養の用意を説いて、文芸道場への参入^{うなが}を促す。作品を論じて、人物を評しても、そういったような周到懇切が纏綿^{ちんめん}している。英語で書かれた外国学者の文学論が、固より英米の読書社会を意識して書かれたものであるの異って、これは言言句句、日本学生^との時代と境遇に対する徹底的理解を以て語られている。例えば恋愛詩を論じては、先づ西洋の社会状態から説いて行く、社会的、宗教的偏見の為、英米の大学に於ては、往往説き難いことも極東の大学講座にあっては、スウィンバーン（Algernon Charles Swinburne）を説いても、又ホイットマン（Walt Whitman）を揚^あげても斥^{しりぞ}けても平気である。流石^{さすが}は“異文学異聞”（Stray Leaves from Strange Literature）の著者、英米の伝統のみに執着しないで、一切抱擁^{ほうよう}の態度であったことは、多種多様な講義の題目が雄弁にそれを物語っている。

風呂敷に包んだ数巻の詩集を持って来て教壇に立った先生は、学生の方へ向いては居るが、只一つの近視の眼には、教室の光景は、ただ黒い頭顱^{かぶつ}が、雲烟漠漠^{うんえんぼくぼく}の間に動いている位にしか映じないだろう。年に1回胸のポケットから片眼鏡が取り出される。それは試験を始める時、学生が全部揃っているか否かを見渡すためである。先生は殆どただ空間^{ほとん}に向かって講義していたとも言えるだろう。やがて柔らか味^{あじ}のある英語が流れるように出てくる。普通のディクテーション式ではなくて、自然のままの言いかたで、純然たる講義ではあるが、しかも、ピリオド、コンマ、コロ、ン、ダッシュ、引用符に至るまでが一一文句に添えられるから、ノートを取るのに極めて便利なものであった。

授業の学生は皆かようにして得た筆記を持っている。英米で出版された4巻の文学論は、マクドナルド氏が^と大谷正信、田部隆次、茨木清二郎、内ヶ崎作三郎、栗原基、小日向定次郎、石川林

四郎、落合貞三郎のものを参照して、グランド・ホテルの一室に於て、タイピストに打たせたものから、アースキン教授 (John Erskine, 1879-1951) (筆者注：同氏は、Columbia 大学の英文学教授) によって校訂、編集された。(以下省略)

H. 厨川白村は書き記している。彼は“小泉先生そのほか”に於て先生の講義は天下一品であった。と。又情緒本位の文学教授法がとりわけその特色で、彼の徒らに西人の筆に成れる注疏の書を辿って、一語源の説明に、2時間3時間を棒に振り、遂には芸術の真意にだも触れ得ざる学究先生の為す所とは真に霄壤の差であった。しかしこのことは、彼の学風が、かの天才肌の作家に有り勝ちな浅薄な読書趣味を意味するものでは決してない。彼は、所謂学究の徒ではなかったが、毫も受売でない自己の観賞を、博洽の識と鋭敏なる理解とを有って語り、さまで芸術的価値なき、ベオウルフ (Beowulf) 等の古詩の研究に没頭して、動もすれば文芸の真諦を逸し去らんとする英米大学の英文学教授とは、全く趣を異にした。

なお小泉先生は日本の学生達の為に懇切丁寧にパラフレージング (paraphrasing) (解説、詳解) や難解語句の説明解釈を試みたので勢い学生のノートは語句やパラフレージングにも亘って詳しいものであったが、出版された講義集にはその部分は多く省略されている。と付言している。

小泉先生の講義の実態

筆者はここで、気分を変え、“夜の詩” (Poems on Night, the Moon and the Stars) と題する講義の中の一詩に関するものに触れて見たいと思う (伊沢東一氏の訳を拜借の上で)

前学期が始まってまもなく、教え子の一人が月を歌った詩を列挙してほしいと私に要望してきた。その折、私はできるだけ早い時期に月の詩について講義しようと考えていたのだが、思ったほど容易には素材が見当らなかった。月の詩を個別にとり上げて講義してみようという考えも、今は棄ててしまったと打ち明けざるを得ない。個別に扱うならば文学的にも大いに意義深いものになるはずだが、そうするには、この主題は西欧詩人の立場からすれば<夜>の主題とあまりにも切り離しがたく関係している。だから、この講義は、おおまかに言えば、天空の灯火を扱うというよりも、<夜>を主題としたものになるだろう。とはいえ、それを通して最良の詠月詩がちりばめられることは追い追いついてくるだろうから、お望みなら、後でそれらだけを選び出してみても構わない。しかし、それをするだけの価値はないように私は思う。

日本や中国の、月の詠歌のおびただしい数に比べると、同じ題材の、出来の良い英詩の数はかなり少ない。むろん詠月詩を部分的に——一行とか二、三行の断片を——抄出し、詩選を編むこともできよう。しかし、そんな小断片の文学的価値は、おおむね付随的で字句上のものになってしまうだろう。換言すれば、想念や情感よりも、形式とか字句の選択を根拠とした評価になってしまうだろう。英国の学生にすれば、このような小断片詩集は言語上の価値を有するのかもしれない

が、諸君にとっては、まず何の値打もないだろう——なぜなら諸君にとって、西欧詩歌の真価は観念や情感のうちに在るのであって、芸術的な言葉彫りにあるわけではないからだ。

だから、私としては詩全体を、それも際立って個性的な観念を含むものだけを、引用することになるだろう。（以下省略）

卓抜な詩体、伝統にかなった詩風という点では英国女流詩人中の第一人者であるクリスティーナ・ロセッティ (Christina Georgina Rossetti) が夜空の景観を葬送の光景に譬えている。（ここで彼女の詩を引用してあるが割愛する）……今では諸君もきっと「いまわの日」(the dying day), 「いまわの太陽」(the dying sun), 「太陽の死」(sun death), 「赤く染まる日輪の死」(the red death of the day-star), 「血に染まる西空」(the sanguine West), 「落日の血で赤赤と染まる海」(the waters dyed with the blood-red of the sinking sun) といった英語の詩的成句にもなじんできたにちがいない。こうした表現は、どれも諸君には耳慣れない響きがあるかと思うが、ヨーロッパではこれらが一般的に使われだしてからもう幾世紀にもなる。しかしながら、このようなやり方で——つまり、月を、葬送の燈火、星辰の運行を、かがり火を運ぶ哀悼者の長い葬列に見たてるというやり方で——太陽の葬儀という着想全体を詩に実現した最初の一人は、ミス・ロセッティではなかったかと思う。だが、本当の月のロマンスを詩に託して表現するには、もっとはるかに有効な方法がある。故郷を遠く離れた地で月を眺めていた男が、幾千マイルも離れた恋人の家の上空にもその同じ月が今照っていることに、ふと思い至るといふ中国の古詩を、諸君はおぼえているだろうか。この種の詩情は、人類がすでに表現可能にしてきた最も美しい詩情——私が言っているのは、感情と、感情をかきたてる自然との関係性、に対する意識のことである——のひとつであることはまぎれもない。実際、自然というものは、それ自体では殆ど取るに足らないものである。われわれが詩に託して努めて表現すべき事柄は、自然がわれわれのうちに惹き起こす感情である。人はどんなに器用に風景を描写しようとしても、それを言葉で正確に塗り上げることは決してできない。ところが、人はそれよりも遙に好ましいものを塗り上げることができる。われわれは風景を眺めながら抱いた思想や感情を表現することができる。英文学にも、先ほど述べた中国の古代詩人がとった手法と全く同じそれで、全篇効果をあげているたいへん有名な英詩がある。私が少年の頃は誰もがこの佳品を習い覚えたものだし、雄弁術の授業では決して朗唱された詩である。諸君の中には知っている者が居るかも知れない。だから、全篇そっくり引用する必要はなかろう。かなり長い詩行だから。しかし、私が今まで示唆してきたあの文芸学上の原理——自然の景観それ自体の描写よりも、それが惹き起こす情動の描写に関する原理——を例証できるぐらいの量は、引用したいと思っている。その佳品の名は「ライン河畔の町ビンゲン」(Bingen on the Rhine)。一英国婦人、キャロライン・エリザベス・ノートン夫人 (Mrs. Caroline Elizabeth Norton) の作で、普及版詩選集のページのなかで、この詩は彼女の名声を常に蘇らせてくれる数少ないもののひとつになっている。

諸君の中で、生憎この詩を知らない人が居るかも知れない。その人の為にも、外人部隊につい

て多少述べておきたい。所謂フランス外人部隊は今日、最も世に知られた、最も好奇心をそそる軍団の一つである。以前は僅か二部隊から成っていたらしいが、近年大分変わり、今日では、以前よりも強力な軍隊になっていることは、まず間違いない。外人部隊はフランス兵から構成されたものではなく、また、徴兵によって形成されたものでもない。所属隊員の総てが志願兵——あらゆる国の、そして略世界全域から来た男たち——であった。彼らが外人部隊に参加したのは、概して栄光や報酬を願ってのことではない。彼らは、少なくともその多くは、名誉ある死に方を望んで入隊して来たのである。外人部隊に入ると、その男は氏名を変えるから、多分、それ以後は社会的にも抹殺されたのであろう。彼が何者であるか、かつては何をしていたのかを尋ねる者は、誰ひとりとして居なかった。ただ、一兵卒としての任務の遂行を要求されるだけで、しかも軍規は極て厳格であった。社会的にも許され難い大罪を犯した男たち、恥ずべき愚行をしでかした男たち、賭博で破産した男たち——ありとあらゆる類いの逃亡者や絶望した男たち——がこの部隊に入って来た。それは一種の体のいい自殺方法であった。したがって、甚だ奇妙な混成部隊であった。一般兵の中には、かつて大貴族であった者も居れば、盗賊に過ぎなかった者も居た。俸給——高額であった——だけが目当てで従軍している者も多少は居たかも知れない。外人部隊はその名称が示す二重の意味で“foreign”であった。つまり、本国の軍役に携わるのではなく、主に植民地に駐屯し、無謀な遠征では地の果てまで派遣された。二の足を踏みたくなる恐ろしい事態や、幾百人もの生命の犠牲を強いる事態が生じた場合には、この外人部隊に出動要請が来るのが一般的であった。

<p>A soldier of the Legion lay dying in Algiers,</p>	<p>外人部隊の一人の兵士がアルジェの都で倒れ、 息を引きとろうとして居た、</p>
<p>There was lack of woman's nursing, there was dearth of woman's tears ;</p>	<p>女の看護の手も無く、女の涙にも欠けていた、</p>
<p>But a comrade stood beside him, while his life-blood ebbed away,</p>	<p>だが生命の血潮が引いて行く間にも、一人の同 志が傍らに立ち、</p>
<p>And bent, with pitying glances, to hear what he might say.</p>	<p>憐みの視線をくれながら、彼が言おうとする事 を聞こうと、身を屈めて居た。</p>
<p>The dying soldier faltered, and he took that comrade's hand ;</p>	<p>死にかけた兵士は ためらいつつ 同胞の手をとり、</p>
<p>And he said, "I never more shall see my own, my native land :</p>	<p>口を開いた、「もう 二度と、私は、わが国を わが祖国を、目にする事はないだろう</p>
<p>Take a message, and a token, to some distant friends of mine,</p>	<p>遠く離れた、わが友に 言伝と 形見と を 持って行っておくれ、</p>
<p>For I was born at Bingen, —— at Bingen on</p>	<p>私は、ビンゲンの生まれ——ライン河畔の都、</p>

the Rhine. ビンゲンの。
 “Tell my brothers and companions, when 「私の兄弟と 仲間とが 心地よい
 they meet and crowd around, 葡萄畑に 寄り集まって、
 To hear my mournful story, in the pleasant 私の悲話を聞こうと あなたを囲んだなら、
 vineyard ground, どうか 彼らに 伝えて、欲しい、
 That we fought the battle bravely, and when われらは 勇敢に 戦いはしたが
 the day was done 日暮れて 見れば、
 Full many a corse lay ghastly pale beneath 累冪たる 屍が 落日の下で おぞましい
 the setting sun ; 土気色を浮かべて 横たわって居たと。
 And, ‘mid the dead and the dying were some 死んだ者や 死につつある者の中を
 grown old in wars, 戦いつつ 年月を積みながら、
 The death—wound on their gallant breasts, 雄雄しい、その胸に 数ある傷痕の最後を
 the last of many scars, 飾る 致命傷を受けた者も居れば、
 And some were young, and suddenly beheld 若くして 突然 己が生の暁が
 life’s morn decline, —— 消えていくのを 見た者も居ると——
 And one had come from Bingen, —— fair そのなかに ビンゲンから来た者も居る
 Bingen on the Rhine. ——ライン河畔の美しきビンゲンから。
 “Tell my mother that her other son shall 「母に伝えて欲しい もう一人の息子が
 comfort her old age ; あなたの老後を 癒してくれるだろうと。
 For I was still a truant bird, that thought his 私は いつまでも わが家を、鳥籠と思う
 home a cage, 放縦な 鳥だったからだ。
 For my father was a soldier, and even as a 父は 軍人で まだ幼かった、私だが
 child
 My heart leaped forth to hear him tell of 凄絶な 父の戦話を 聞いて
 struggles fierce and wild ; 心は もう 先へ飛び立っていたからだ。
 And when he died, and left us to divide his やがて 父も亡くなり 残された私たちは
 scanty hoard, 僅かばかりの 遺産を 分配したが
 I let them take whate’er they would, —— but 彼らには のぞむものを とらせ——
 kept my father’s sword ; 私は わが父の 刀剣をもらい、
 And with boyish love I hung it where the 少年らしい 敬愛の 想いで 燦燦と、
 bright light used to shine, 光を浴びる所に、それを掛けていたものだ、
 On the cottage wall at Bingen, —— calm ビンゲンの わが 小屋の壁に——
 Bingen on the Rhine. ライン河畔の 平和な、ビンゲンの。
 “Tell my sister not to weep for me, and sob 「妹に伝えて欲しい、 喜びに満ちて、靴音

with drooping head,	も高く、堂堂と、	連隊が	再び
When the troops come marching home again,	故国に	凱旋したなら、	どうか私を悼んで
with glad and gallant tread,	泣いたり、	項垂れて涙を流したりするなど	
But to look upon them proudly with a calm	静かな	揺ぎない目で	胸を張り
and steadfast eye,	兵士たちを	眺めろと、	
For her brother was a soldier too, and not	おまえの兄も	軍人だから	
afraid to die ;	死ぬことを	怖れはしなかったと。	
And if a comrade seek her love, I ask her in	やがて、同胞が、	妹の愛を求めることがあるな	
my name,	ら、わが名にかけて、	彼女に願う、悔ん	
To listen to him kindly, without regret or	だり、恥じらったりせず、	彼の話を、優	
shame,			
And to hang the old sword in its place (my	聴くことを、	そして使わなくなった刀剣は	
father's sword and mine)	所定の場所に吊しておくことを	(父のも私の	
	もだ)		
For the honour of old Bingen, — dear	古都ビンゲンの名誉のために——		
Bingen on the Rhine.	ライン河畔の愛するビンゲンの。		
“There's another, not a sister ; in the happy	「妹ではないもう一人の女が居る。楽しかった		
days gone by	過ぎし日に、	もしもあなたが	
You'd have known her by the merriment that	居たならば、	瞳のなかで輝く喜びを見て	
sparkled in her eye ;	あなたは彼女の存在を知るようになったろう		
Too innocent for coquetry, too fond for idle	その無垢の心は媚を知らず	心優	
scorning,	意味もなく	人を蔑みはしないが、	
O friend ! I fear the lightest heart makes	それだけに、友よ、	最も明るい心が、時には	
sometimes heaviest mourning !	最も暗い嘆きを味わいはしないだろうか。		
Tell her the last night of my life (for ere the	わが永訣の夜の様子を	彼女に語って欲い。	
moon be risen,	(月が上がる前に、	わが肉体は苦痛から解	
My body will be out of pain, my soul be out	れ、わが魂は牢獄から解き放たれるのだ)		
of prison), —	——		
I dreamed I stood with her, and saw the	私は夢に見た、	彼女と共に立ちつくし、	黄昏の
yellow sunlight shine	陽が	きらめくのを共に見ている夢を、	
On the vine-clad hills of Bingen, — fair	蔓草に	被われたビンゲンの丘に	きらめくのを
Bingen on the Rhine.”	——	ライン河畔の美しきビンゲンの丘に	
.			
His trembling voice grew faint and hoarse,	震えを	帯びた彼の声もやがて、	か細くかすれ

— his grasp was childish weak, — 握る掌の力も 子供の様に力なく、
 His eyes put on a dying look, — he sighed 双眸は、死相を帯びて——溜息をつくつと、
 and ceased to speak ; 口を閉じた。
 His comrade bent to lift him, but the spark 彼を起こそうと、戦友は身を屈めたが
 of life had fled, — 生氣は すでに逃げ去り——
 The soldier of the Legion in a foreign land 外人部隊の兵士は こうして異邦の地で
 was dead ! 息をひきとった。
 And the soft moon rose up slowly, and やがて穏やかな月が、ゆっくりと上がり
 calmly she look down 血に塗れた屍体の散らばる
 On the red sand of the battlefield, with 戦場の熱砂を静かに 見下ろしていた。
 bloody corpses strewn ;
 Yes, calmly on that dreadful scene her pale そう、あの怖い光景を 白い月光が
 light seemed to shine 静かに 照らしているようにも思われた
 As it shone on distant Bingen, — fair 遠いビンゲンの町に照り渡っていたように
 Bingen on the Rhine ——ライン河畔の美しきビンゲンの町に

末連に言及されている熱砂は、その地方特有のものである。戦いはアルジェリアの、それも、おそらくは南部の砂漠地帯の境域を越えた一帯で交わされていたからだ。詩句の中で他に説明すべき箇所は何もないとは思いが連の一つに出てくる *coquetly* という言葉については、おそらく付言しておいた方がよからう。この言葉は二様の意味——ただかわいいとか、悪戯っぽいといった意味と、それとは別に悪い意味——で用いられるが、この詩で使われている意味は、その後の方である。男の注目や讃辞を惹き出すだけの魅力を具えた美貌の娘たちは、自分を誉めてくれる者に自分の魅力を験すことで、こっそり楽しみたがるもので——男の人格などは一切無視して——自分がどの程度、男に影響力を有しているか見ようとするものだ。自分に惚れている者に向かって、このような態度をとる娘を悪い意味で *coquetry* を犯していると言う。同じ連の *idle scorning* という語は、多分、やや判然としないかもしれない——愚かしい傲慢さぐらいに理解しておいた方がいい。それ以外に説明すべき点は何もない。

素朴だが力強いこの詩の美質は、実際には極めて高度の文学——特定の時代や国に限定されず、地方の描写によって得られる効果にも依存せず、それが含むパトスや真理や美を失わずに、略すべての言語に翻訳され得る文学——に属するものである。述べられている出来事は、話に殆んど違和感がなく、ドイツ人の生活の一端というよりも、日本人の生活の一端と言ってもよいぐらいだ。これらの詩句を日本語散文に訳したとしても、そうした翻訳によって人の心を動かすこの詩句の美質や真理まで失うものでないことは分る筈だ。ただ既に述べたように、この詩が当面の講

義主題に関連してくるのは末連のみである。結びの——血に染まる砂漠や兵士の遺体を見下ろしながら、同時にまた、変わらぬ穏やかさで、幾百マイルも離れたドイツの静かな町を見下ろしている——月を歌った数行、この結行にこそ、この作品の壮大な力感と美とがあるように思われる。そこには情動を操る技巧のうち、所謂「一級の手際」と呼べるものさえ窺えると言ってよい。諸君にもその理由は理解できると思うが、私なりにそれを出来るだけ明確に解説してみるべきだと思っている。詩の前半では、われわれが生来頼ち持っている憐憫とか愛情とか同情といった情動が、連を追うにつれて、しだいに高まり、その高揚感死の場面が終わる迄続く。ところが、次の場面では、物語が訴えるパトスに共鳴してわれわれの感情が尚も、うち震えている時に、突然、徹底した自然の冷淡さの啓示、顕現、不意打ちが、冷水を浴びせられたかのように襲いかかってくる。月はこの出来事の一部始終を見、そればかりかもっと多くのものを見ているが、それによって自身変化を受けることは少しもない。こうした事態の下では、その光や穏やかさと清澄とが、そのまま殆んど冷酷なまでに思われてくる。フランスのある偉大な現代詩人も、〈目〉を歌った詩の中で、そっくり同じ手法を用いて大成功を取っているが、その詩は、かなり以前に諸君に読んで聞かせたかと思う。彼の作品を読むと、嘗ては太陽を仰ぎ見ながら、今は瞳に帰した数限りない人間の目、美しい瞳に、われわれの想が及ぶ。「だが」と彼は言う、「その太陽はいつもと少しも変わりなく、朝が来るたびに昇るのだ」。まさにこの自然の冷淡さという考えこそが、われわれが、たった今、皆で読んだ末尾に巧みに採り入れられる時、なんとも強烈な感動を喚起するものになるのである。

この場合、感情的衝撃は直接的である——それは、現在心にある感情に対する衝迫、心に浮かぶものに駆り立てられた感情に対する時を同じくした衝迫として襲いかかってくる。優れた劇、偉大な悲劇では、屢この種の効果もたらされる。ところがフランス詩人の作品の場合には、この感情は回顧的で——過去への内省により駆り立てられている。夜とその気配とか景観とかが、われわれに与える通常の印象は、えてして、このような類のものになりがちである。もっと奥深く、心を直かに揺り動かす効果、「ライン河畔の町ビンゲン」の末連で産み出されるような効果は、現実には詩歌においてさえ稀なことであり、それだけに一層賞賛すべきである。……

ミッチェル・マクドナルド (Mitchell MacDonald) (前出) 宛書翰

東京にて 1899年(明治32年)2月

親愛なるマクドナルド——(前略)私の講義に君が興味を持って呉れて居るのは有難い。併し、あの講義が出版に価して居るのは君が誤っている。あれはただの口授の——手控えさえ見ないで、私の頭から口へ出した——講義なのだからその形式が良い訳はない。10回か15回書き直したなら出版しても宜しい。併しそんな時間をかける価値は有るまい。私は学者ではないまた最善の文学者を批評し得る程の批評家でもない。私とは比較にならぬ程立派にそれを為し得る人間は幾十人と居る。しかし、あの講義は東京大学には良いものだ——長い経験で、日本の学

生の考え方、感じ方に適合するように述べたもので、また出来る限り単純な言葉で言い現わしたものであるから。併し日本に居る教授が、その講義を出版すると、その教授が知っている事は全部その中に入っていると当局者は考えて、別の教授を探しそうだ。こんな種類の物はどんな物でも日本で出版するのは策の得たものではない。それに他の所でも、その結果は言うに足らぬものであろう。他人が私よりも上手には書けないもの——或いは少なくとも書こうとしないもの——の方へ私の力を蓄積するがよからう。

（未完）

参 考 文 献

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| ラフカディオ・ハーン著作集（恒文社） | 小泉八雲全集（第一書房） |
| 雑誌「へるん」（八雲会事務局） | 田部隆次著「ラフカディオ・ハーン小泉八雲」 |
| 明治村通信（博物館明治村） | 濱川 博著「風狂の詩人小泉八雲」 |
| 近代文学研究叢書（昭和女子大学） | 池野 誠著「松江の小泉八雲」 |